



| | |
|--------------|---|
| Title | 特集：日本学方法論の会「視覚表象と〈日本〉」 まえがき |
| Author(s) | 北原, 恵 |
| Citation | 日本学報. 2015, 34, p. 1-2 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/51384 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集：日本学方法論の会 「視覚表象と〈日本〉」 まえがき

北 原 恵

2014年度「日本学方法論の会」は、「視覚表象と〈日本〉」というテーマで、二人のゲストをお招きした。現代美術家で秋田公立美術大学教員の高嶺格先生と、視覚文化論の研究で京都精華大学教員の佐藤守弘先生である。

高嶺格さんは、京都市立芸大に在学中からダムタイプに参加し、パフォーマンス、ビデオ、インスタレーションなどを用いて、現代社会における支配/被支配や、当事者/非当事者の入り組んだ関係を浮かび上がらせ、辛辣かつユーモア溢れる作品を作ってこられた。たとえば、映像作品の《木村さん》では社会の中でタブー視される障害者の性について可視化し、《ゴッド・ブレス・アメリカ》ではアメリカ帝国主義を批判。さらに自らの内に潜む自国中心主義に目を向けてきた高嶺さんは、私たちが日本学という研究の場で取り組んでいることを、美術の現場で実践されてきたのだと思う。それゆえ私は日本学のメンバーに紹介したいとずっと考えてきた。ようやくお招きできる機会となった今回、高嶺さんは「誰と共に生きるか？ ——生き延びるための表現」というタイトルで、主に最近のご自身の作品について紹介して下さった。

次にお話いただいた佐藤守弘さんは、芸術学・写真史・視覚文化論を専門とされ、従来での美術史研究の枠に収まらない視点で、新しい視覚文化論をリードしておられる研究者である。主に19世紀後半から20世紀前半にかけての近代日本における風景やトポグラフィの果たした社会的な機能——具体的には、江戸泥絵、横浜写真、20世紀初頭のアマチュア芸術写真、マスメディアにおける京都表象などを扱ってこられた。日本学の学生たちは文字資料だけでなく視覚資料を扱う者もいるが、その扱い方に関わり問題の多いことがよくある。もちろん唯一の正しい方法論や理論があるわけではない。今回の佐藤さんの講演「郷愁と発見——日本近代の不気味な他者」は、20世紀初頭の日高長太郎の風景画、1970年代のディスカバー・ジャパンのポスター、篠山紀信撮影の横尾忠則という3つの視覚イメージを対象としており、その分析の方法論から私たちが学ぶところは大きいだろう。

今回の日本学方法論の会は、視覚分析の方法論の再考とともに、現在、急速な勢いで戦争化に向かう日本社会の問題をテーマにしたいと考え、院生たちと相談を始めた。結局、院生たちの応答も盛り込めるようにするため、「視覚表象と〈日本〉」というひどく大きく

特集：日本学方法論の会「視覚表象と〈日本〉」 まえがき（北原恵）

曖昧なタイトルになってしまったのだが、方法論の会で、現代美術家と視覚文化論を専門とする研究者をお招きしたのは、おそらく初めての試みだったのではないだろうか。また、高嶺さんの映像作品「木村さん」を今回、見せていただくことが出来たが、セクシュアリティの問題について論じたのも初めてだろうと思う。しかも、佐藤守弘さんと高嶺格さんにはこれまでそれほど接点があるわけではなく、それもお二人に決めた理由のひとつだった。現代美術家の作品について、評論家が解説するという形にはしたくなかったからである。異なる視点、異なるアプローチをする人々との出会いの場を創りたかったからである。二人の違いは、単に美術家と研究者というだけではない。「(私の) 身体」と「アメリカ」——この二点をめぐって二人の立ち位置はかなり異なっているように思える。

お二人の講演に続いて、日本学の院生2人が応答した。

ソアレス・モッタ・フェリッペ・アウグストさんは、「半田知雄の移民絵画：移民の姿を描きとめて—記録と郷愁の狭間」と題して、自身の研究テーマである半田知雄の移民表象に焦点を当て論じた。大阪のゲイタウン・堂山町を研究する鹿野由行さんは、佐藤さんの論考の前提となる空間理論を紹介し、特定の人々を排除する公共空間の問題性についてコメントした。本特集では、その後参加者全体での議論とそれに続く更なる院生たちの応答も含めて収録する。

謝辞：

さて、方法論の会の開催にあたっては、企画の担当責任者であった私が、家族の急病のために当日欠席しなくてはならなくなり、関係者の皆さんに大変ご迷惑をおかけしたことを心からお詫びしたい。特に、遠方からわざわざお越しくくださった発表者の高嶺先生と佐藤先生、当日急遽司会を引き受けてくださった同僚の宇野田先生、そしてコメンテーターたちを含む院生のみなさん、短い期間で文字起こしをしてくださった小川てつオさんたちの暖かい協力にあらためてお礼申し上げたい。倒れた母は手術を無事乗り越えることができたことも感謝の言葉とともにご報告したい。